かのん

奏音

なまえ:

はじめに

混声合唱団コールクライネスへようこそ！

これから一緒に合唱の基本を練習していきます。
この場には合唱部に入っていた人、クラス合唱が苦手だった人、カラオケが好きな人…
様々な人がいると思います。
そんなどの人にも贈りたいのがこの冊子です。

この冊子にはクライネスの歴史の中で積み重ねられてきた
合唱の基本がつまっています。
わからなくなったらこの冊子に立ち返ってみましょう。

今まで触れてこなかった人も心配いりません！
とりあえず隣にいる先輩と一緒になって声を出してみましょう。
最初はわからないことも多いと思いますが
できることも増え、きっとどんどん楽しくなりますよ！

では、一緒に楽しみましょう！

コールクライネス　学生指揮者　岡田大輝

第１章　発声の基礎

1．発声とは？～声の種類～

　みなさんは普段、どんな声で喋っていますか？驚いたときに出る声やお母さんが電話に出るときに出す声、カラオケで歌うとき…実は声の出し方はいろいろあります。クライネスでは、声の種類や質を指して「発声」ということが多いです。合唱では色んな発声ができるととても楽しいです。まずは、周りのみんなと声が合うような「自然な声」が出せるような発声にチャレンジしましょう！

　「自然な声」とは「妙な力が入っていない声」とも言えます。自然な声を出すためには**美しい姿勢と腹式呼吸を身につけること**が大切です。声を張り上げるのではなく、自分自身の持っている最も魅力的な声を響かせましょう。

おまけ１：地声と裏声

　地声、裏声とはクラシック分野の声楽用語で声区（せいく）（レジスター）と呼ばれる分類法に属します。

　低い音から次第に高いほうに発声していくと、ある音の高さでそれまでの出し方では声が出せなくなります。その音より高い声を出すには声の出し方を変えなければなりません。この出し方の変わる部分を境にして低い側を地声、高い側を裏声と言います。

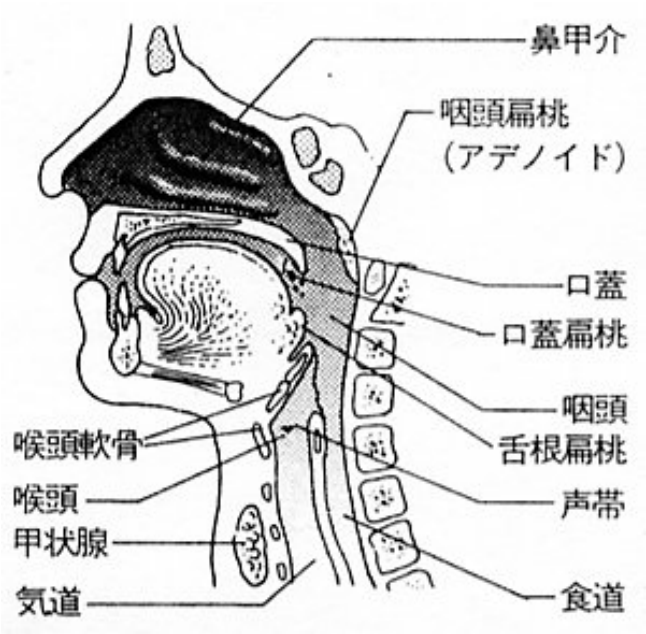
　地声と裏声の変化にともなって音色も変化します。この音色の変化を利用すると、聴く人に与える印象を変えることができます。

　また、女性の皆さんは裏声が発声を行う上でのスタンダードとなります。そこで、カラオケなどのように地声でがんばらずに、裏声での発声を身につけましょう。

	声区	聞く人に与える印象
地声	低い声	力強く重たい感じ
裏声	高い声	軽く澄んでいる感じ

♪クラシックでは地声から裏声への転換を気づかれないようスムーズに移行することが理想とされています

おまけ２：通る声



日常生活の中で「声がよく通る」とか「通らない」という表現を聞いたことはありませんか？歌声においても同じように「通る声、通らない声」が存在します。歌声における「通る声」とは、無理せず良い発声で歌えている声のことです。「通る声」を出すためには喉頭(ノドボトケ)を通常の位置より少し下げます。すると喉頭と咽頭との音響的なつながり方が変わり、喉頭のところに別の共鳴する空間ができます。

また、「通る声」は自分自身にはあまり大きく聞こえず、逆に「通らない声」の方が上手に聞こえることがあります。なので、ぜひ先輩にみてもらって「通る声」を出しているときの感覚をつかみましょう。

※ファルセットってなぁに(・ω・)?

ファルセット(Falsetto)とはイタリア語で『不適切な声』『偽りの声』と言う意味です。元来は成人男性が女声の使う高音の声域まで拡大・補充するために使われた唱法でした。近年ではファルセットの概念がかなり拡大解釈されてきたため正確な定義をすることはできません。声の出し方から言えば裏声にほぼ近いと考えられますが、ファルセットは声帯の中にある筋肉がほとんど働きません。そのため、裏声を「芯のある裏声」と「芯のない裏声」に分けたときに後者をファルセットと呼びます。

２．体から余計な力を抜いて、良い姿勢で立ってみよう！

声を出す際にはのどだけではなく、全身を使う必要があります。スポーツ選手もストレッチや体操を入念に行ってから競技の練習に入りますよね？それと同じで合唱をする際も、まずは自分の体を歌うことができる状態にするための準備を行いましょう。

２―１．体をほぐそう　～歌う体を作る～

まずはストレッチをしましょう。柔軟に筋肉を使えるように、全身の筋肉をほぐしましょう。歌は特に上半身の筋肉を使います。

♪ チェック

- □ フェイストレーニング（ほっぺたなどを自分でマッサージする。いろんな表情をしてみる。）
- □ 肩もみ
- □ 各部の筋肉をよくのばす。２人組でやるのも効果があります。

さらに、体全体をリラックスし、脱力して歌うための準備をします。

♪ チェック

- □ 上半身：ジャンプする（飛んでいる最中が脱力できている状態。）肩を上げ下げする。
- □ 背中：まず前屈姿勢になって上半身の余計な力を抜く。その状態から背骨を組みたてるように少しずつ上半身をあげていく。
- □ 首：頭を前後左右に倒して首筋をのばそう。また、頭を左右に回す。←この際絶対早く回さない！ボールを転がすようにゆっくりと。
- □ あご：あごを左右に素早く動かす。限界まであごを開けてから力を抜く。
- □ 全身：力を抜いて立ちしばらくそのまま。指先や足先が暖かくなるのを感じる。

◆良い例

〇脱力が出来ている。上級生に腕を揺らしてもらったときにぶらぶらする。

◇悪い例

×上半身に力が入り、かちかちになっている。

×譜面を持ったとき、手に余分な力が入る。

２―２．姿勢　～良い発声の基本を作る～

まずは「**良い姿勢の３点セット**」を覚えましょう。

良い姿勢の３点セット

①　おなかを引き締める
②　胸を高くする
③　あごをちょっとひく

～良い姿勢の３点は必ず覚えましょう！～

特に順番が大切です。足は肩幅くらいに開いて、おなかを引き締めてみましょう。おなかを引き締めたときに前傾になるのを直すため、胸を高くしますましょう。また口の奥もしっかり開けられるように、あごも引きましょう。そうすると、体がまっすぐなりますね！

♪ チェック

☐ 良い姿勢の３点はちゃんとできているか？
☐ 確認のために壁に足と背中と頭をつけてみる。それが出来たらそのまま前に２．３歩でて、その姿勢をキープできるようにする。
☐ 肩幅くらい足を開いて立っているか？
☐ 以下のようになっていないか？

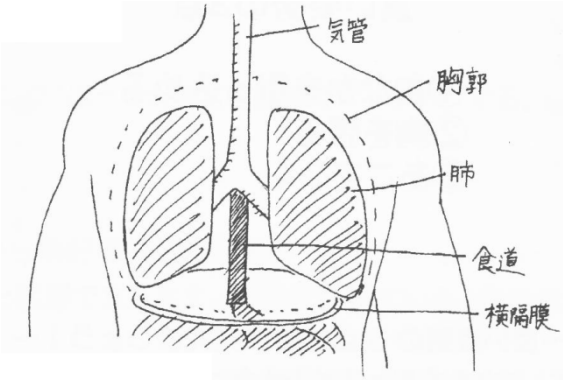
×上半身が反っている、または猫背になっている。
　→壁に背中をつけてチェック！まっすぐな体になっているかな？
×あごを引いた際にのどに力が入っている。
　→あごまわりをちょっと動かしたりしてリラックスしよう！
×前から誰かに押されるとすぐ倒れる。
　→体がカチコチだと歌うのも大変！軽く動かして肩や膝も脱力しよう！

～歌っている最中に良い姿勢をチェックしましょう！
脱力、良い姿勢は良い発声の基本です！～

３．実際に息を流してみよう！

３―１．胸式呼吸と複式呼吸

呼吸には**胸式呼吸**と**腹式呼吸**があります。普段の生活中ではほとんどが胸式呼吸になっており、寝ているときは腹式呼吸になっています。胸式呼吸では、「肋骨、胸骨、鎖骨」などの胸を広げることを強く意識します。それに対して、腹式呼吸では、「**横隔膜**」が重要になります。横隔膜の位置は下の図で確認してください。

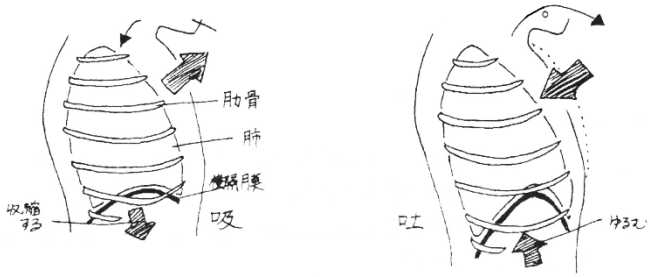


息が入ることで肺が膨らみます。胸式呼吸は肺が大きくなった分、「肋骨、胸骨、鎖骨」を広げるのです。対して、腹式呼吸は肺が大きくなった分、「横隔膜」が下に下がるのです。その結果、**お腹が膨らみます**。

では、実際に腹式呼吸をしてみましょう。

息を吐く…横隔膜が緩んで（上がって）、おなかがへこみます。

息を吸う…横隔膜が収縮して（下がって）、おなかが膨らみます。



続いて実際に息を流してみましょう。

腹式呼吸の練習は息を吐ききることから始まります(息を「吸う」ことから始めていけません)。まず、もうこれ以上吐けないというところまで体に入っている空気を吐き出します。そして出し切ったら筋肉の力を抜きます。すると自然に空気が入り、無駄な力が入っていない状態で空気を受け入れることができます。次に息を吐きます。息を吐くにつれて、お腹が凹んでいくのを確認しましょう。

♪ チェック

- □ 無駄な力が入っていないか？
- □ 先にやった姿勢が崩れていないか？
- □ 息を吐ききっているか？吐ききったあとは、おなかを緩めるだけ。
- □ 息を吸ったときに胸（肩）が上がらないようにできているか？
- □ 息を流したときにあごに力が入っていないか？

3-2. 【発展】丹田とお腹の支え

3-1 では、腹式呼吸で息を吸ったり吐いたりということをしてきました。しかし、これだけでは実際の歌で長いフレーズを歌う時は、息が足りなくなってしまいます。

肺は風船のようなもので、肺自体には筋肉はついていません。その状態で口を開くと、空気がどんどん出て行ってしまいます。そのため、**空気が出て行く量を調節**しなければなりません。このための方法として、主に①喉を締めて空気の出口をせまくする。②丹田を使って息をキープする。という二つの方法があります。しかし、①の方法を使うと、綺麗な声が出せません。そのため、②の方法を身につけます。

丹田は、**おへその指 3 つ分下**辺りにあり、お腹のまわりの筋肉が集まっている所です。ここを、前に押し出すようにしながら息を出すことで、喉を締めずに息をキープすることができるようになります。これを支えといいます。

丹田の練習をやる前に、腹式呼吸が完全に出来るようになっているか、確認しましょう。丹田と支えについては難しいので、焦らずに練習しましょう。

■ 練習

- □ 丹田に手をあてて跳ね返してみる
- □ 4 拍→8 拍→16 拍→（32 拍）の順にブレスを流す
- □ 出来たらだんだん拍を短くしていく

～吐く息はおなかで調節しましょう！～

♪ チェック

□ 息を吐ききっている。

□ 息を均等に吐けている。吐く息はおなかでコントロールするように。

□ 以下のようになっていないか？

×息を流したときにあごに力が入ってしまう。

→あごを動かしながらでもできると、脱力できている証拠！

×途中で息が足りなくなってしまう。

→丹田がうまく使えてないか、他のところにも力が入っているかも。

×ブレスが浅くなっている。

→息を吐ききったら、いい姿勢で、お腹をゆるめるだけ！

歌を歌う時にも丹田を意識した呼吸を自然に行う必要があります。また、丹田をうまく使うためには、丹田の周りの筋肉（呼吸筋）を鍛えることが大事です。ここでは、呼吸筋を鍛える方法を一つ紹介します。

■犬ブレス（ワンちゃんの呼吸法）

目的：お腹の動きと呼吸を結びつける練習をする・呼吸筋を鍛える

① 正しい姿勢をとります。

② 両手をへそからみぞおちにかけておきます。

③ 腹部をすばやく小さく動かしながら呼吸を繰り返します。

夏の暑い日に、犬が舌を出してお腹を動かしながら呼吸をしているのを良く見かけます。そのまねをするような感じで 10～30 秒くらいを 1 セットにして練習します。いきなりたくさんやると、貧血してしまうので気をつけてください。最初は、あまり長くできなくてもかまわないので、自分のペースで練習しましょう。

４．歌ってみよう！

今まで、歌うための体の使い方や呼吸のやり方について準備をしてきました。今度は実際に声を出してみましょう。

声を出す上で一番大切なこと、それは「**口の奥を開いて共鳴させる**」ことです。声そのものは、声帯の振動によって発生しますが、それを共鳴させることによって初めて、美しい、響く声を獲得できます。

トンネルや洞窟の中で声を出すと普段よりよく響きます。これは、トンネルや洞窟の内壁で声が共鳴しているからです。口の奥を開いて発声することで、トンネル・洞窟のように共鳴させることが出来ます。

＊口の奥を開くとき、以下のことに注意してみましょう。

１　口を縦に開く

口が横に広がらないよう、こいのぼりのように縦に長い口を作りましょう。

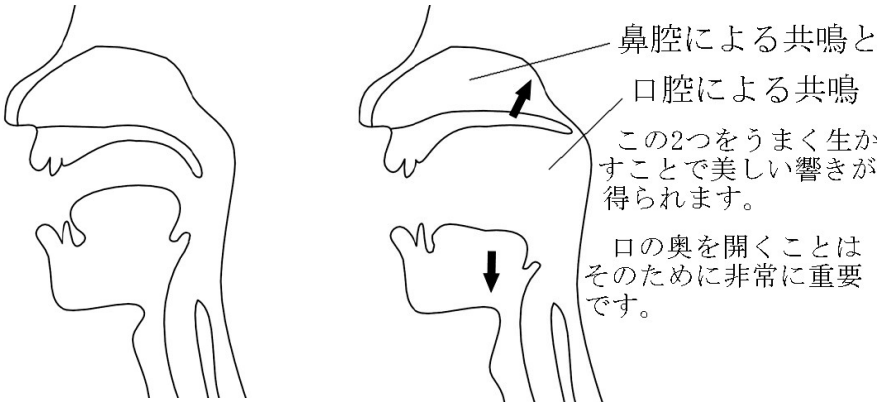
２　奥歯の間を開ける

奥歯と奥歯の間の空間を広げるイメージで、口を開きます。

３　舌を下げる

舌の力を抜き、リラックスすると自然に下がります。これもあくびの感覚で。

以上の事に注意すると、口の奥が右下図のように開きます。こうすると共鳴によって、美しい、響く声が出るわけです。この時も、体、特に口やあご、首周りに余計な力が入っていないか確認して下さい。**基本はあくまでリラックス**です。



通常時　　口の奥を開いた状態

ハミングについて　～響きの基本～

[ng]：日本語の「りんご」の「ん」の時の音
[n]：日本語の「な」を発音するときの子音
[m]：日本語の「ま」行を発音するときの子音

特にこの中で大事なのは「ng」ハミングです。この音を出しているときの響きの位置はすべての声の基本となる位置なので、早めにマスターしましょう。次に説明する母音についてもハミングからつなげることで豊かな音になりやすいです。（んご～、んが～など）

母音の話　～響きを保ったまま発音する～

日本語には「ア・イ・ウ・エ・オ」の５つの母音があります。普通に日本語を話していると、特に「イ」や「ウ」の母音で口の奥が狭くなりがちですが、歌うときにそうなってしまうと、響きのない声になってしまって良くありません。では、どうすればいいのでしょうか？

まず、口の奥を開いて「ア」を発音しましょう。「ア」は全ての母音の基本です。

他の母音については、「ア」を基本として、以下のように「ア」から変化させて発音してみましょう。

「ア」　→　「エ」　→　「イ」

奥歯の間の空間が狭くならないように気をつけて、母音を変えます。「イ」のときに口が横にならないようにこいのぼりをしながら、声を前に集めるようなイメージで出してみましょう！

「オ」　→　「ウ」

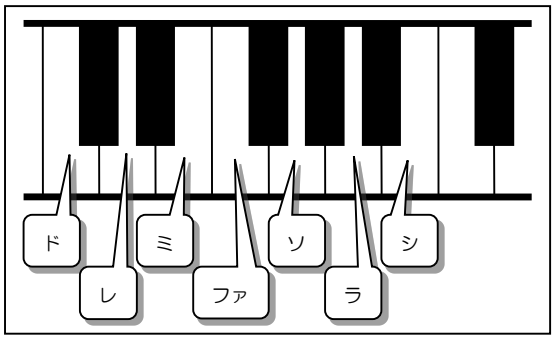
「オ」の広い空間は保ったまま、唇を前に突き出すイメージで「ウ」に変化させましょう。

５　上級生に聞いてみよう！

ヴォイストレーニングでは、新入生１人につき上級生１人がついて新入生の発声を見てくれます。体に余計な力が入っていないか、ブレスをしたり声を出したりするときにお腹が使えているか、口の奥が開いているか、などについて見てもらって下さい。何か分からないことがあったら**気軽に聞いてみましょう！親切に教えてくれるはずです。**

第２章　基礎知識

１．ドはドーナツのドじゃないよ！～音の呼び方～



みなさんは音の呼び方といえば、普通は「ドレミ…」を思い浮かべますよね。でも、実際には「ドレミ…」以外の呼び方も存在するのです。

そこで、以下に4種類の音の呼び方(ドイツ式・イタリア式・アメリカ式・日本式)をまとめました。表を見ると分かるように、「ドレミ…」という呼び方は、実はイタリア式の呼び方なのです。

ドイツ音名	C	D	E	F	G	A	H
読み方	ツェー	デー	エー	エフ	ゲー	アー	ハー
イタリア音名	Do	Re	Mi	Fa	Sol	La	Si
読み方	ド	レ	ミ	ファ	ソ	ラ	シ
アメリカ音名	C	D	E	F	G	A	B
読み方	シー	ディー	イー	エフ	ジー	エー	ビー
日本音名	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト	イ	ロ

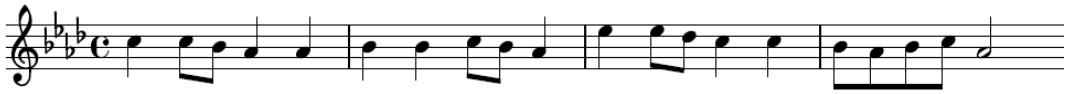
ドイツ音名	Ces	Cis	Des	Dis	Es	Eis	Fes	Fis	Ges	Gis	As	Ais	B	His
読み方	ツェス	ツィス	デス	ディス	エス	エイス	フェス	フィス	ゲス	ギス	アス	アィス	ベー	ヒス
イタリア音名	Do −♭	Do −♯	Re −♭	Re −♯	Mi −♭	Mi −♯	Fa −♭	Fa −♯	Sol −♭	Sol −♯	La −♭	La −♯	Si −♭	Si −♯
読み方	ド♭	ド♯	レ♭	レ♯	ミ♭	ミ♯	ファ♭	ファ♯	ソ♭	ソ♯	ラ♭	ラ♯	シ♭	シ♯
日本音名	変ハ	嬰ハ	変ニ	嬰ニ	変ホ	嬰ホ	変ト	嬰ヘ	変ト	嬰ト	変イ	嬰イ	変ロ	嬰ロ

※1　**嬰（えい）と♯（シャープ）は「半音上げる」、変（へん）と♭（フラット）は「半音下げる」**ことを意味します。「半音」については後にやります。

クライネスでは基本的に音名のことを**ドイツ語読み**で扱います。

Q：Cis と Des はどう違うんですか？

A：ド♯とレ♭は確かに同じ音ですが、使い方が違います。簡単な例を見てみましょう。



Gis は As と同じ音ですが、この曲の調は Gis-Dur ではなく As-Dur です。この場合、単純にこの曲がフラット系の曲(ト音記号の後ろにいっぱいフラットが付いていますね)であるため、音の呼び方は♯系の呼び方(Gis)ではなく♭系（As）の呼び方で呼んでいます。

Column 「ティ」とは？

クライネスにいると、「ティ」という音の名前を呼ぶ人がいます。この「ティ」とは何の音のことでしょうか？

実は、「ティ」は「シ」という音の別の呼び方なのです。ちなみに東アジア(日本)と半分くらいのヨーロッパの国は「シ」という呼び方を使っていて、アメリカやハンガリー等の国は「ティ」という呼び方を使っています。クライネスでは「ティ」を使っています。また、ハンガリー式にならって、「ド♯」「ファ♯」「ソ♯」「シ♭」をそれぞれ「ディ」「フィ」「スィ」「タ」とも言います。

「ドレミファソラティド」のそれぞれの子音を取って「ｄｒｍｆｓｌｔｄ」と書く人もいます。

ド	ド♯	レ	レ♯ / ミ♭	ミ	ファ	ファ♯	ソ	ソ♯ / ラ♭	ラ	シ♭	シ
d(ド)	di(ディ)	r(レ)	ri(リ) / ma(マ)	m(ミ)	f(ファ)	fi(フィ)	s(ソ)	si(スィ) / lo(ロ)	l(ラ)	ta(タ)	t(ティ)

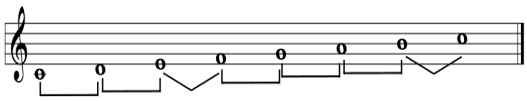
Q. ♭と♯の他に変化記号はあるの？

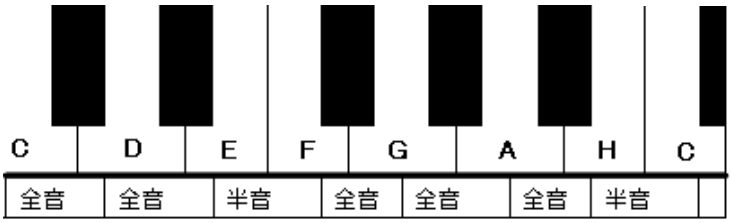
A.はい、あります。「その音の全音下げる」のを「ダブルフラット 𝄫 」、「その音の全音上げる」記号を「ダブルシャープ 𝄪 」といいます。調合で一度半音変化、さらにそこから半音変化、結果的に五線譜の位置から全音下がるときに使います。

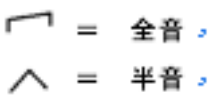
2．全音、半音とは

ところで鍵盤上で隣あう音との間隔は一定ではないことを知っているでしょうか。

C と D、D と E、F と G、G と A、A と H の音の間隔は、E と F、H と C の間の二倍あります。C と D、D と E、F と G、G と A、A と H は「**全音違う**」と言い、E と F、H と C は「**半音違う**」と言います。周波数的には全音上がると2の1/6乗倍になり、半音上がると2の1/12乗倍になります（平均律の場合）。

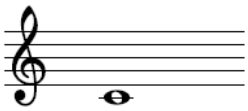


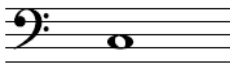




３．ト音記号、ヘ音記号について

ト音記号、ヘ音記号は、五線譜のどこを「C」にするのか指定する記号（音部記号）です。このどこに音符があるかによって出す音が決まります。


ト音記号


ヘ音記号

上の五線譜に書いてある音がそれぞれの記号で書いてある際の「C」、つまり「ド」の音を表しています。

System

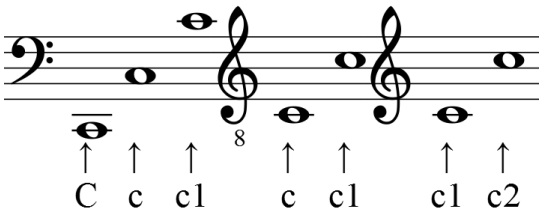
ト音記号の場合は五線からさらに一つ下の線に刺さった音が C、ヘ音記号の場合は下から 2 本目と 3 本目の線に挟まれた音が C（上図の場所）になります。そしてその場所から一つ（線と線の間隔の半分）上がるごとに、D、E、F、G、A、H、となり、一つ下がるごとに、H、A、G、F、E、D、と変わっていきます。

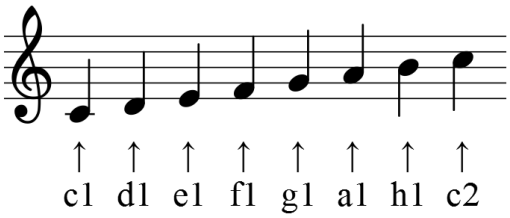
ソプラノ、アルトの方はト音記号、ベースの方はヘ音記号でほぼすべての楽譜が書いてあります。テナーの方は楽譜によって違うので大変ですが、両方使えるようにしましょう！

※補足

また、C は C でも様々な高さの C があるのはわかりますよね。C から 1 オクターブ上がるとまた C に戻ります。しかし、すべて C と言っているとわかりづらいので、呼び名が決まっています。
(これはドイツ式の表記です。アメリカ式・日本式などもよく使われます。)

音の高さでみると下から 1C=(ヘ音記号下第５間)、C=(ヘ音記号の下第 2 加線)、c=(ヘ音記号の第 2 間)、c1=(ト音記号の下第 1 加線) (ピアノの真ん中)、c2=(ト音記号の第 3 間)、c3=(ト音記号の上第 2 加線)になります。また、音名の右の数字は C から始まり H で終わり、その一つ上の C からまた数字がひとつ変わります。
また、他の呼び名もありますが、詳しく知りたかったら上級生に聞いてみてください！





※左の図の、真ん中のト音記号の下に書いてある「8」は「8va bassa（オッターヴァバッサ）」といい、**通常よりも 1 オクターブ下げる**ことを意味しています。

第３章　楽譜を読んでみよう

１．８分～全音符、休符

各音符、休符によって、音の長さ、休みの長さが決まります。

	8 分音符といいます。四分音符の半分の長さになります。		**8 分休符**といいます。四分休符の半分の長さになります。
	4 分音符といいます。		**4 分休符**といいます。四分音符と同じ長さだけ休みます。
	2 分音符といいます。四分音符の二倍の長さになります。		**2 分休符**といいます。四分休符の二倍の長さになります。
	全音符といいます。四分音符の四倍の長さになります。		**全休符**といいます。四分休符の四倍の長さになります。

※音の高さを表現せず、リズムのみを表現する歌い方を「リズム読み」といいます。

２．16 分以上の音符、休符

16 分音符

32 分音符

8 分以上の同じ音符が二つ以上続いた場合、旗をくっつけて表記します

＝

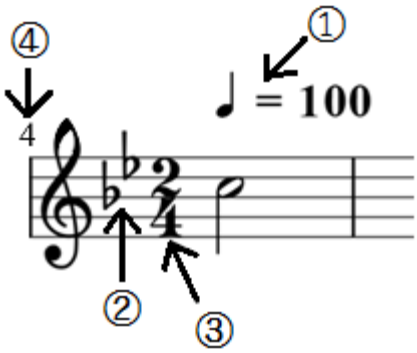
16 分以上の休符の場合も同様に、数が 2 倍になるごとに長さが半分になっていき、休符の出っ張りが一つずつ増えていきます。

16 分休符　 32 分休符　 ＝ ＋

３．付点

音符、休符に点がつくと、音、休みの長さが1．5倍になります。

４．音符、休符以外の記号



①テンポ記号

「（音符）＝（数字）」があったらこれです。曲の速度を表すもので、1 分間にその音符が数字の分だけ出せる速度であることを意味します。上図の場合、1 分間に 4 分音符が 100 回出せる速度という意味です。

「Andante（歩くような速さで）」のようにイタリア語などで書かれることもありますが、そのときはおよそのテンポになります。

②調号

移動ドの章（第 4 章）で詳しく説明します。

③拍子記号

拍子記号はその曲のリズムを表すもので、一小節に分母の分の音符が分子の数だけ入ることを意味します。上図の場合、一小節に四分音符が2つ入る事を意味します。

④小節番号

楽譜の各段の左端にあります。この場合はこの小節が 4 小節目であることを示しています。書いてない場合もあるので、そのときは自分で書きこむようにしましょう。

特殊な拍子記号

「コモン」と読み、意味は「4 分の 4 拍子」と同じです。

「アラブレーベ」と読み、意味は「2 分の 2 拍子」と同じです。

5．重要な記号

演奏記号については第6章で詳しく説明しますが、特によく出てくる記号をここで紹介します。これだけはぜひとも覚えてしまいましょう。

速さに関係する記号

ritardando (rit.)	リタルダンド	だんだん遅く
accelerando (accel.)	アッチェレランド	だんだん速く
a tempo	ア・テンポ	もとの速さで

meno mosso	メーノ・モッソ	今までより遅く
piu mosso	ピウ・モッソ	今までより速く
Tempo primo (tempo I)	テンポ・プリモ	最初の速さで

強さに関係する記号

ppp	ピアニッシシモ	非常に弱く
pp	ピアニッシモ	とても弱く
p	ピアノ	弱く
mp	メゾ・ピアノ	やや弱く
mf	メゾ・フォルテ	やや強く(普通の強さで)
f	フォルテ	強く
ff	フォルティッシモ	とても強く
fff	フォルティッシシモ	非常に強く

crescendo (cresc.) <	クレッシェンド	だんだん強く
decrescendo (decresc.) >	デクレッシェンド	だんだん弱く
diminuendo (dim.)	ディミヌエンド	

sf	スフォルツァンド	その音だけ強く
>	アクセント	その音を強調して

接頭語

poco ○○	ポーコ	少し○○
poco a poco ○○	ポーコ・ア・ポーコ	少しずつ○○
molto ○○	モルト	非常に○○
sempre ○○	センプレ	常に○○
senza ○○	センツァ	○○しない

第４章　移動ド入門

１．移動ドとは？～固定ドと移動ド～

第２章「音の呼び方」のところで、ドレミ以外にも、音の呼び方がいろいろあると言いましたが、実はその呼び方は**「音名」**と**「階名」**とに分かれているのです。

・音名…

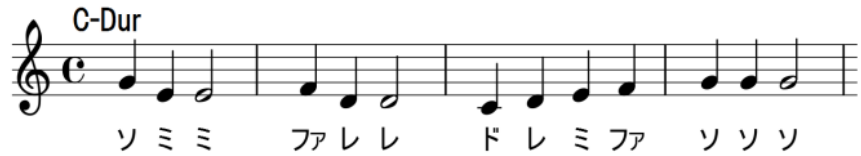
全ての音の名前を一通りに決める呼び方です。音の住所のようなもの。

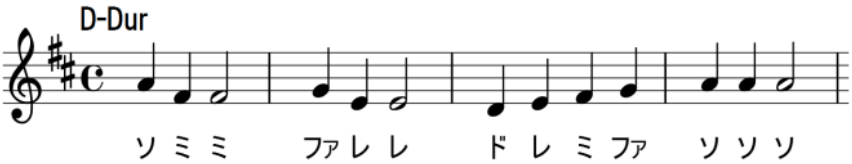
例えば、皆さんは普通ドの音を「ド」、レの音を「レ」と言いますよね。何を当たり前な事をと思うかもしれませんが、皆さんが普段使っているこの「ド、レ、ミ…」の使い方は「音名」です。

・階名…

こちらは、馴染みのない人が多いかもしれません。ある基準の音を決めて、その音との相対的な高さを言うときは**「階名」**を使います。基準の音が異なっていても、基準の音からの高さが同じ音同士なら、それらは必ず同じ「階名」になります。

「階名」についての具体例を見てみましょう。





上の楽譜は2つとも「ちょうちょ」ですが、音の高さが違っています。これは、調(カラオケで言う「キー」のようなもの。後で詳しく説明します)が異なるからです。しかし、音の位置関係は変わらないので、どちらも階名は同じになるのです。

階名に対して音名は「音の絶対的な高さを表す」とも言えます。

音楽の世界において、その音名と階名についての使い分けのルールがいくつか存在します。このルールは完璧に統一されていないのですが、大きく分けて2つのシステムがあります。ここではその2つのシステムと、それにおける音の呼び方のルールを説明します。

System 1 移動ド

階名のうち、イタリア語の「ドレミファソラティ(シ)ド」を用いたものが**「移動ド」**と呼ばれます。音名はドイツ語(ツェー、デー、エー)で表現することで階名と区別します。音楽史上、元々イタリア語の「ドレミ…」は、階名としてのみ使用されていました。

イタリア語の「ド」は絶対的な高さと関係なく、曲の調によって移動している(ように見える)ため、このシステムは**「移動ド」**と呼ばれます。

System 2 固定ド

音名には一般的に、日本語「ハ、ニ、ホ…」ドイツ語「C(ツェー)、D(デー)、E(エー)」英語「C(スィー)、D(ディー)、E(イー)」が使用されますが、近代になりイタリア語を音名に使う文化が出始めました、これを「**固定ド**」と呼びます。固定ドが誕生したため、区別のために階名で用いるイタリア語は「移動ド」と呼ばれるようになりました。

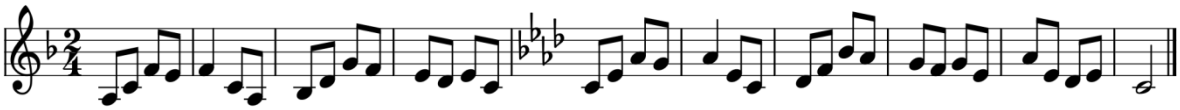
イタリア語の「ド」は曲と関係なく、同じ高さに固定しているため、このシステムは**「固定ド」**と呼ばれます。

Column

おそらく99%くらいの音楽の経験者は固定ドのシステムを使用してきたことでしょう(ヤマハ音楽教室は固定ドシステムを使っているそうです)。逆に、移動ドのシステムの存在を知っている人は少ないと思われます。
クライネスでは移動ドシステムを使っています。いや正しく言うと、クライネスでは移動ドシステムを使うようにしています。ただ、多くの人が音名(絶対的な音の高さ)を「ドレミ」で呼ぶことに慣れているため、クライネスもそれを認めています。

２．How to移動ド…～移動ドってどうやって使うの？～

ここで、説明のために以下の曲を使います。



これはJR山手線の五反田駅などの発車メロディーで使用されている曲です。

ピンと来ないという人も歌えたら思い出せるかもしれません。この楽譜に移動ドを振って(※)みましょう。

※音に名前を対応させることを**「振る」**と呼んでいます(ふりがなを振る、と同じ用法)。つまり、移動ドで使う階名を音に対応させる作業は「移動ドを振る」と呼びます。

1. 調を知る

調とは、「その曲が何の音を基準とした(つまり、何の音をドとした)音階で出来ているか」を表すものです。調が分からないと階名(移動ド)が使えません！問題はどうやって調がわかるようになるか、ということですよね。クライネスでは基本的に、**楽譜をもらった後その曲の移動ドの調がメール連絡で流れます。**移動ドを振る際はこれを利用しましょう。

調は絶対に決まっているものではなく、人によって捉え方はそれぞれです。しかし普通は、移動ドのつけ方が最も自然になるように調を選びます。(上級者になると、自分で移動ドの調を考えることができるようになります。ただし、複雑な曲の場合は人によって解釈が異なる場合があるので、そういう時、**練習においてはメールで送られる調で統一してくださいね**。)

2. 楽譜に振る

調が分かったら、実際に移動ドを振る作業に入ります。

例えば、先ほど挙げた曲の調は以下の通りです。

#1～: F-dur、#5～: As-dur

補足:「#」で始まる数字は小節番号(最初から数えて何小節目か)を表します。つまりこの曲の場合は、最初はF-durで、5小節目になるとAs-durに変わる(転調する)ことになります。

①まずは調を楽譜に記しておきます。

転調するところは改めて調を書かなければなりません。

細かいですが…気を付けて欲しい調名の書き方

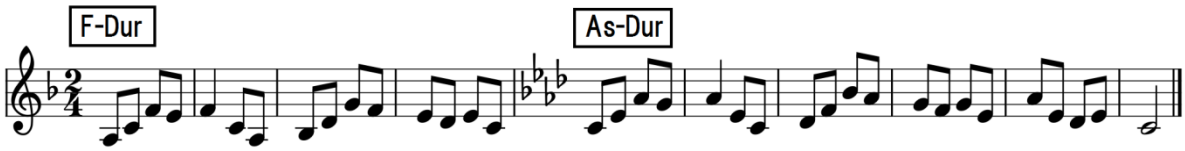
・dur(長調)の場合、その調名の一文字目は大文字で書きます。

（※DurのDは大文字だったり小文字だったりします。）

・moll(短調)の場合、その調名全部を小文字で書きます。

例…E-dur、gis-moll

省略形として、E:やgis:というように、コロン付きで書くこともあります。



②調を書いたら音符に各音符ごとの階名を書きます。次ページの解説とこの冊子の最後にある調の早見表を参考にしてください。

System 階名の振り方

調には「長調」と「短調」があり、使われる音や曲の雰囲気などによって判別されます。

➢ 長調の場合

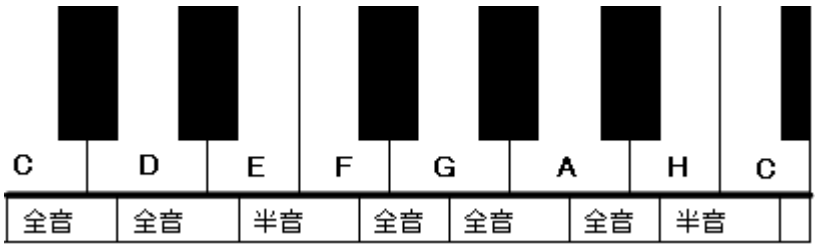
① 長調は「○-dur」表現されているので、○を「ド」の階名にします。
(例)G-dur → G を「ド」の階名

② 次にドレミファソラシは下の図のように全音、全音、半音、全音、全音、全音、半音の間隔が空いているので、そのように間隔を空けながら階名を振っていきます。

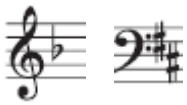
➢ 短調の場合

① 短調は「○－moll」で表現され、○を「ラ」の階名にします。
(例)g-moll→G を「ラ」の階名

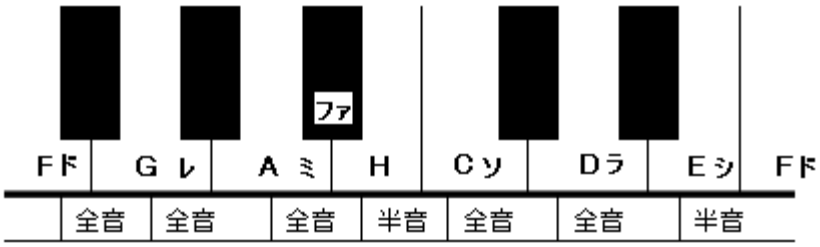
② 全音、半音、全音、全音、半音、全音、全音の間隔を空けながら順番に階名を振っていきます。



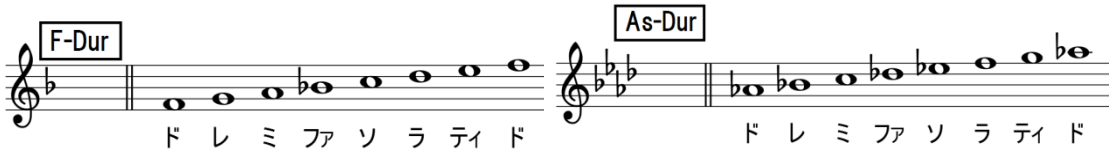
３．調号とは



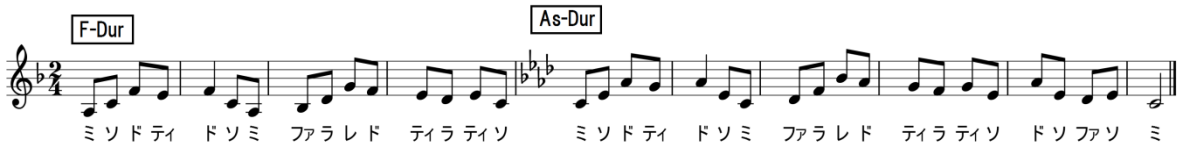
ト音記号、ヘ音記号の右についている♯、♭の事です。この記号の付いている場所の音を半音上げたり下げたりすることを表しています。この記号があることによって、移動ドを使う際にとても楽になります。左上のト音記号のものはF-dur、またはd-mollと置くと



正しく出来ると、



といった感じになるので、これを基に先ほどの楽譜に移動ドを振ってみると、



といった感じになります。

基本的に移動ドを振るのは、音取りのためなら自分のパートだけで十分です。

しかし他のパートのも振ると曲全体のことや和音のことも分かるようになるので、興味がある方は是非他パートの移動ドも振ってみてください。

転調のところはそのまま行かず、新しい調で振りましょう。調が難しくて分からなくなった場合は、<u>この移動ド冊子巻末の早見表を参考にしましょう</u>。

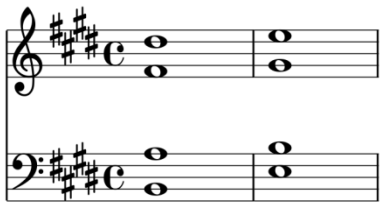
慣れないうちは、上の図のように鍵盤の絵を描くとすこしやりやすくなるかも？

４．移動ドをなぜ使う？～初級編～

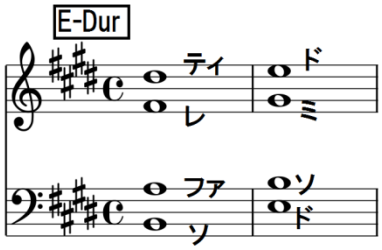
前のページで「固定ド」と「移動ド」を紹介しましたが、クライネスでは「移動ド」を主体として使っています。これは何故なのでしょう？

・音が取りやすくなる！

曲を理解するうえで、和音や音の跳躍が複雑で分かり辛い時があります。そこで移動ドを振れば、そういった音の関係も分かりやすくなります。



見てもあまり分からない…



なるほど、分かりやすくなった！

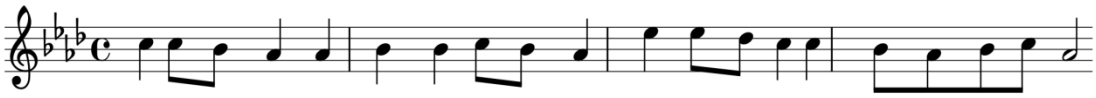
また、固定ドの音感は大きくなってからの訓練ではほとんど育ちませんが、移動ドを使った音感は大きくなってからの訓練でもかなり育ちやすいです。こういったことから、移動ドの方が音を取りやすいということが多いです。

・曲の理解がしやすくなる！

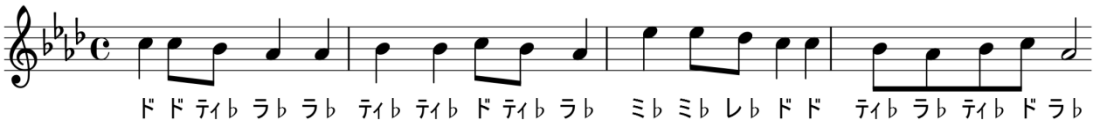
世の中には様々な曲があり、それぞれ異なる「調」を持っています。この「調」には、曲の全体的な雰囲気を決定付ける重要な役割を持っています。

調にもいろいろな種類があり、それによって特定の音に常にシャープやフラットが付くことがあります。これらは固定ドシステムにとって、音の読みやすさを大きく妨げるものとなっています。対して移動ドシステムにとっては、基準となる音を調にあわせて決めてやることにより、階名が分かりやすいものとなります。

例えば…

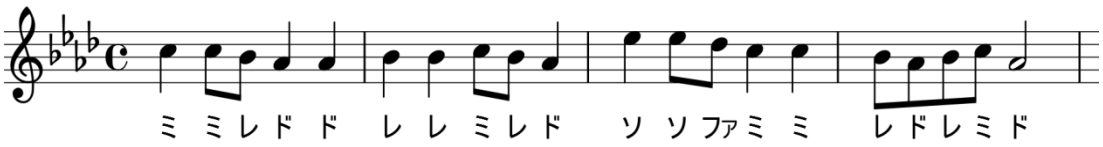


この曲は調が「As-Dur」なのですが、これに固定ドを使って音を読んでみると…



とても分かりにくくなり、読むのも大変です。そこで移動ドを使って音を読んでみると…

移動ドを振ると一応、面倒くさいフラットとシャープがほとんど消えるので、曲を理解するのがとても簡単になります。



なおクライネスでは、音取りをする際は移動ドを歌いながら音を取ります。

こんなに便利で、さらにいろいろと応用が利くので、積極的に移動ドを使っていきましょう！

5. ＦＡＱ～よくある質問～

Q. 「転調」って何ですか？

A. **「転調」**は曲の途中で調が変わることです。調は曲の雰囲気を決めているのですが、曲の雰囲気はずっと同じとは限らず、作曲者は曲の雰囲気を変えたい時に曲の中で調を変える、すなわち転調させることがあります。

似たような言葉に「移調」という言葉があります。同じ曲を別の調でやることを「移調」と呼びます。「移調」の場合、固定ドを使うと音の呼び方が変わりますが、移動ドを使うと呼び方が変わりません。

Q. C-Dur と a-moll は具体的にどう違うんですか？

A.調は雰囲気を作っているので、C-dur と a-moll の違いも雰囲気にあります。え？もっと具体的な答えが欲しいですか？

調には一番大事な基準となる音があります。その音を中心にして他の音が決まっているわけです。C-durとa-mollは移動ドを振ると同じように見えますが、中心になっている一番大事な音が違います。C-durの場合は「C」(ツェー)であるのに対し a-moll は「A」(アー)です。違いはたったこれだけですが、この違いは曲に様々な影響を与えます。

この中心的な音の一番分かりやすい判別方法としては、曲の最後の音を見る方法があります。多くの場合、C-durかa-mollかどちらかであるかが分かっているとき、最後の音がCだったらC-dur、Aだったらa-mollです。この方法を使えば90%以上の確率で同じ移動ドのdurとmollを区別することができます。

Q. 自分も自分なりに調を考えてみたいのですがどうすればいいですか？

A 一番簡単なやり方は楽譜を見ることです。ト音記号とヘ音記号の後ろの所に、調によってシャープやフラットが付いていて、その数も異なります。移動ド早見表を見て同じようなシャープとフラットのパターンの調があれば、その調である可能性は高くなります。このやり方 100%正しいとは限りませんが、簡単な曲の場合はこれでほぼ問題ないです。

Q. 自分は絶対音感なんですが、音取りに移動ドなんていらないですよ。むしろ取りにくくなりますよ！

A.確かに絶対音感の人なら移動ド使わなくても音は取れますが、移動ドは音を取るためだけの道具ではないことに注意してください。音の性格を理解するために移動ドが必要になることもよくあります。

Q. でも移動ドを使ったらせっかく鍛えた音感が鈍くなって相対音感になってしまうじゃないですか？困りますよ！

A.音取りについては、移動ドで歌うとき、移動ドを言うのが辛かったら「no 唱」と言って「ノ」で歌っても構いません。移動ドは口で言うか言わないかの問題ではなく、考え方の問題ですので。
それよりも、絶対勘違いしないで欲しいのが相対音感と絶対音感の関係です。よくある間違いなのですが、**相対音感と絶対音感は背反する関係ではありません。**
相対音感の人は相対的な音の幅がわかる人です。つまりドの音を聞いて自由に5度(ソ)や6度(ラ)の音を正しく歌える人のことです。対して絶対音感の人はある音を聞いてその音名が何かを分かり、歌える人のことです。絶対音感があったら相対音感が付かない、相対音感があったら絶対音階が付かない、なんてことはありません。両方持っている人さえいます。移動ドを使うと、相対音感を身に付けやすくなります。

移動ドを使って音感を鍛えましょう！

※ここからの話は発展的になっていくので、初めのうちはあまり
気にしなくても大丈夫です！

第５章　音程と調(発展)

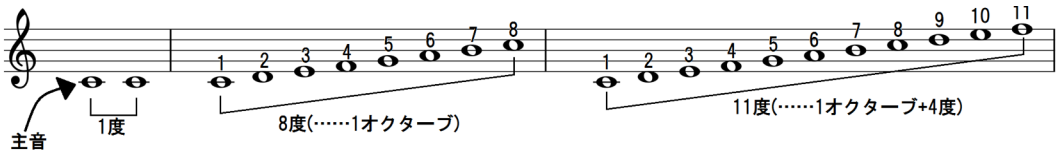
2つの音の幅のことを『音程』といいます。
この『音程』は、度数と完全・長・短等の言葉で表します。

１．度数

System 度数とは？

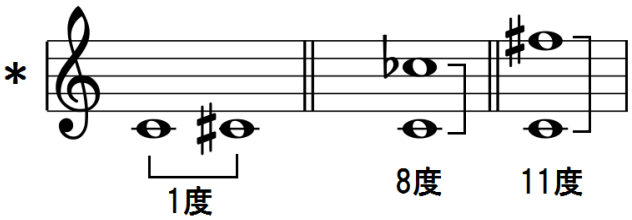
低いほうの音から高いほうの音までの音の数のことを**度数**といいます。

例



「低い方の音から数えて何個目の音か」が度数になります。

※度数の数え方は、♯や♭などの”変化記号”が付いていても**変わりません**！！



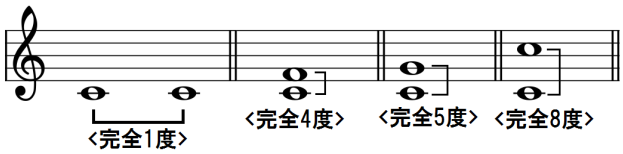
＊のように、変化記号が付いた場合、そうでない場合では”度数が同じ”でも音の幅が変わります。
…では、変化記号がつく場合とつかない場合はどのように区別するのでしょうか？
それが次に紹介する「完全系」と「長短系」です。

２．『完全系』と『長短系』

音程は、この**<u>2つの系の度数</u>**に分けられます。

System 完全系

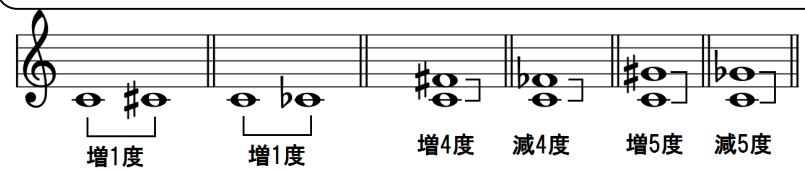
『完全系』･･･›１度、４度、５度、８度、これらの度数が完全系です。
それぞれ完全１度、完全４度、完全５度、完全８度といいます。



黒鍵と白鍵の数（開始と終了含む）
完全4度⇒6コ（全音×２＋半音）
完全5度⇒8コ（全音×３＋半音）
完全8度⇒13コ（全音×６）

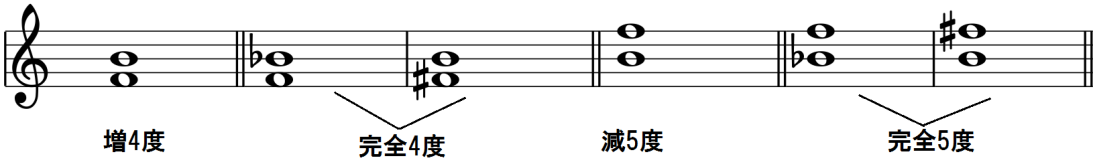
System 増、減

完全音程より”半音広い”、”半音狭い”状態を”<u>増</u>”、”<u>減</u>”で表します。増〇度、減〇度といいます。



（全く同じ音程は「完全１度」で、それより狭くはならないので、「減１度」はありません。）

＊注意　ティ-ファ、ファ-ティは変化記号が付いていない状態で減5度、増4度音程となります。

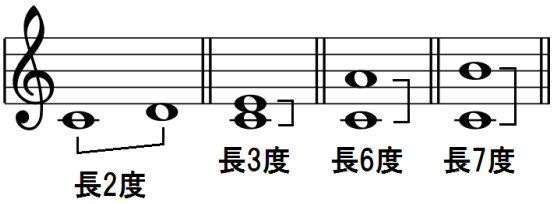


つまり1、4、5、8度は『減＜完全＜増』で表す、ということです。

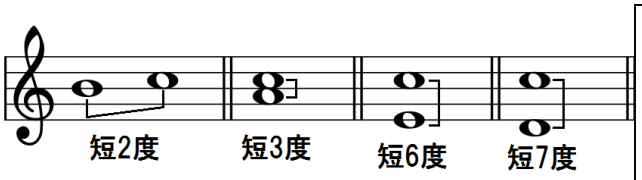
System 長短系

『長短系』…>２度、３度、６度、７度、これらの度数が長短系です。

それぞれ長2度、長3度･･･、短2度、短3度･･･といいます。

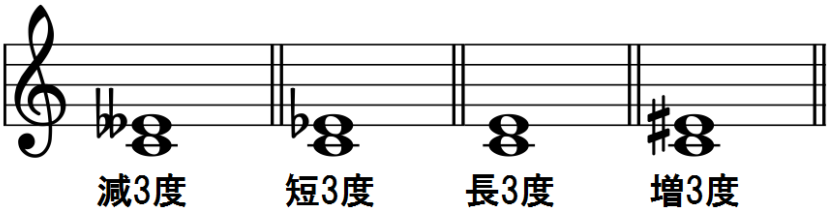


黒鍵と白鍵の数（開始と終了含む）
長2度⇒3コ（全音）
長3度⇒5コ（全音×2）
長6度⇒10コ（全音×4＋半音）
長7度⇒12コ（全音×5＋半音）



黒鍵と白鍵の数（開始と終了含む）
短2度⇒2コ（半音）
短3度⇒4コ（全音＋半音）
短6度⇒9コ（全音×4）
短7度⇒11コ（全音×5）

音程より**半音広い**状態は、完全音程が半音広くなった状態と同じ**”増”**で表します。
長音程より**半音狭い**状態は、短音程で、短音程より**半音狭い**状態は、完全音程が半音狭くなった状態と同じ**”減”**で表します。



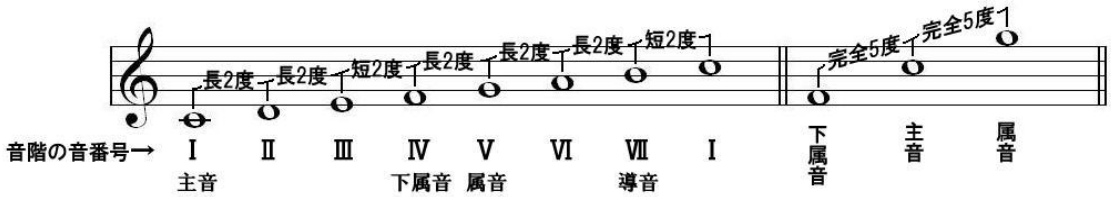
つまり2、3、6、7度は『減＜短＜長＜増』で表す、ということです。

完全系、長短系をまとめて図にするとこのようになります↓

３．調

調は、特定の音を”主音”としてできる長音階、短音階によって決まります。主音は、C-Dur だったら C の音、G-Dur なら G の音になります。『主音の音名+音階の名称』を合わせて調名といいます。長音階を用いる調を**長調(Dur)**、短音階を用いる調を**短調(moll)**といいます。（普通は短調といえば自然短音階を用いる調を言います）

<長音階>



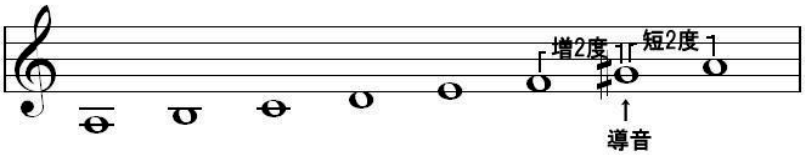
（主音の完全五度下の音を下属音、完全五度上の音を属音、第 7 音に当たる音を導音と言います）

<短音階>

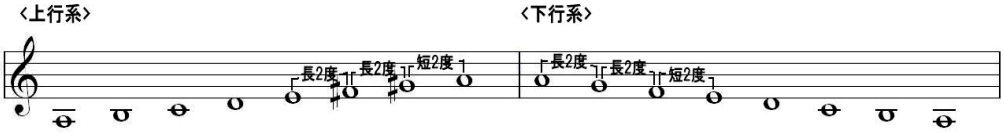
・自然短音階

＊短音階のⅦは、臨時記号によって半音高くされ、
「主音」と短2度の関係にあるときのみ導音と呼ぶ。

・和声短音階



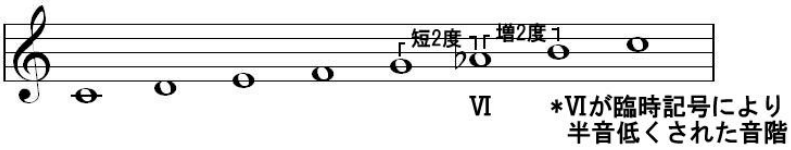
・旋律短音階



＊上行系でⅥ・Ⅶが臨時記号によって半音高くなり、下行系で自然短音階に戻る。

<和声長音階>

この音階を使用する調を MollDur と呼びます。（長調でも短調でもない）



４．移動ドをなぜ使う？～上級編～

１．純正律

本文で具体的に音程の幅を示すために、音程で全音いくつ分半音いくつ分と表現していますが、この考え方は音楽的に間違っています。なぜなら音程というのは、半音がいくつ、全音がいくつあるから何度、なのではなく、5度は5度、8度は8度。半音・全音は関係なく成立するものなのです。

音の高さは、振動数によって決定されます。音程は、この音の振動数の比率によって決まります。このような音の取り方を「**純正律**」と呼びます。ここにある音があるとしましょう。この音の振動数を2倍にすると、その音はもとの音と1オクターブ（完全8度）の関係になります。つまり1オクターブとは、半音が12個あるのではなく、音の振動数比が、 1:2である音程なのです。完全5度なら2:3の関係、完全4度なら3:4になります。

これらのように、音程というのはまず半音あるいは全音ありきではなくて、ある音ともうひとつの音がどのような周波数の比なのかというものなのです（なお、二つの音の振動数比がそれぞれ単純な数であるほど、響きは純粋になり、協和しやすくなります）。

これらのことより、曲の調、つまりは移動ドを知ることによって全音、半音以上に音を正確に取ることが可能となります。

２．実際にどのように音を取ればいいか

しかし実際に歌うときは周波数なんかはわかりませんよね。そこで、周波数と対応させて音に性格をつけて歌うという手法があります。どういうことかというと、例えば、「ティ」は思ったより高めに鋭く歌ったり、「ラ」はちょっと思ったより低めに鈍く歌ったりすれば、音の性格と合って綺麗に聞こえます。

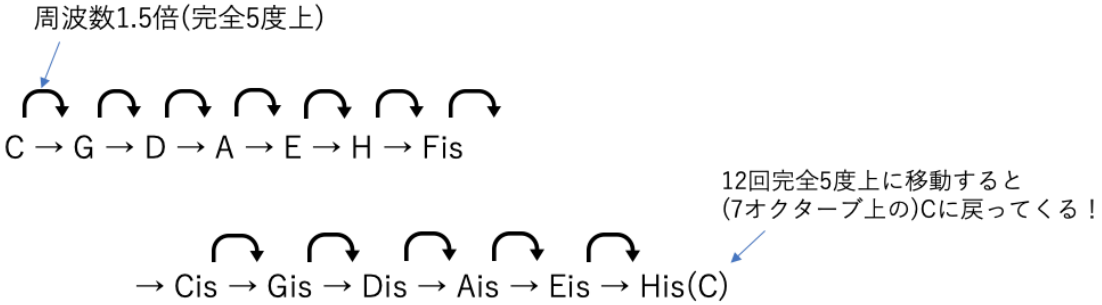
音の性格について研究していたカーウェンという人の研究によると、音の性格はハンドサインで表現することができます。右の図は「コダーイ・システム」と呼ばれる、ハンドサインと音の説明の対応表です。ハンドサインを使えば、音の性格を目でも体でも理解しやすくなります。

おまけ．平均律とは

通常私たちが目にしているキーボードなどに使われている平均律とは、1 オクターブを 12 等分した音律、つまり半音の周波数比を全て$\sqrt[12]{2}:1$にしたものです。

普通、2 つの音が単純な周波数比にある時、美しく響く状態になります。このような音の取り方を純正律と呼ぶのはさきほどやりましたね。ドとソの幅にあたる完全 5 度は 2:3（1.5 倍）の周波数比、また完全８度（1 オクターブ）は 1:2（2 倍）となります。

しかし、このような純正音程で通常の音階を作成しようとすると矛盾がおこります。例えば、完全 5 度は 12 回上方に積み重ねると、12 種類全ての音を経由して 7 オクターブ上の音程に到達しなければなりません。しかし、周波数比の 1.5 は 12 乗しても 2 の 7 乗にはなりません。このように、純正律にはある音程（例えば 5 度）を全て純正に保とうとすると、他の音程（例えばオクターブ）が純正にならないといった現象がどうしても生じてしまうのです。こういった矛盾を解決するため様々な調律法が試みられてきていて、その結果たどりついたのが平均律なのです。



$1.5^{12} = 129.7\ldots$ は7オクターブ、つまり$2^7 = 128$と少しずれる！

第６章　記号 (発展)

第３章の最後にも、この表の中で特に重要な記号が載っています。まずはそちらに載っているものを優先して理解するのがよいと思いますが、参考までに様々な音楽記号を紹介します。

１．速さを示す用語

速さを示す方法には、メトロノームによる速度記号と、言葉による速度標語の二つがあります。メトロノームが客観的で具体的な示し方であるのに対し、言葉は曲の性格や表情もある程度表し、主観的なものを加えられる特色があります。

～速度の一定したもの～

非常に遅い	Adagissimo	アダジィッシモ	静かに、きわめて遅く
	Lentissimo	レンティッシモ	ゆるやかに、きわめて遅く
	Larghissimo	ラルギッシモ	幅広く、きわめて遅く
遅い	Adagio	アダージョ	静かに遅く
	grave	グラーベ	重々しく遅く
	Largo	ラルゴ	幅広く遅く
	Larghetto	ラルゲット	幅広く、ラルゴよりやや速く
	Lento	レント	ゆるやかに遅く
やや遅い	Adagietto	アダージェット	静かに、アダージョよりやや速く
	Andante	アンダンテ	ややおそく、歩く速さで
	andantino	アンダンティーノ	歩く速さで、アンダンテより速く
中	Moderato	モデラート	中ぐらいの速さで、ほどよい速さで
やや速い	Allegretto	アレグレット	軽快に、アレグロより遅く
	Allegro moderato	アレグロ・モデラート	ほどよく快速に
速い	Allegro	アレグロ	快速に
	Presto	プレスト	急速に
	Vivace	ヴィヴァーチェ	生き生きと速く
	Vivo	ヴィーヴォ	活発に、生き生きと
非常に速い	Allegrissimo	アレグリッシモ	きわめて快速に
	Prestissimo	プレスティッシモ	きわめて急速に
	Vivacissimo	ヴィヴァチッシモ	きわめていきいきと

～速度の変化するもの～

遅くなるもの		
lentando	レンタンド	だんだんゆるやかに
meno Allegro	メーノ・アレグロ	よりおそく
meno mosso	メーノ・モッソ	今までより遅く
rallentando(rall.)	ラレンタンド	だんだんゆるやかに
ritardando(retard.,rit.)	リタルダンド	だんだん遅く
ritenute(riten.)	リテヌート	すぐに遅く
slentand	ズレンタンド	だんだんゆるやかに
速くなるもの		
accelerando(accel.)	アッチェレランド	だんだん速く
affretando	アフレッタンド	急いで
con moto	コン・モート	動きをつけて(速めに)
doppio moviment	ドッピオ・モヴィメント	２倍の速さで
incalzando	インカルツァンド	せきたてるように
piu Allegro	ピウ・アレグロ	より速く
piu mosso	ピウ・モッソ	今までより速く
stretto	ストレット	せきこんで
stringendo(string.)	ストリンジェンド	だんだんせきこんで
もとの速度に戻すもの		
a tempo	ア・テンポ	もとの速さで
Tempo primo(tempo Ⅰ)	テンポ・プリモ	最初の速さで
速度の正確なもの		
in tempo	イン・テンポ	一定の速さで
tempo giust	テンポ・ジュスト	正確な速さで
演奏上の自由を許すもの		
a piacere	ア・ピアチェーレ	任意に
ad libitum(ad lib.)	アド・リビトゥム	自由に
tempo ad libitum	テンポ・アド・リビトゥム	自由な速さで
tempo rubato	テンポ・ルバート	盗まれた速さ。一定の時間の中で感情にまかせ、速さやリズムを自由に

		加減するロマン派の手法

その他		
l'istesso tempo	リステッソ・テンポ	同じ速さで
lo stesso tempo	ロ・ステッソ・テンポ	
lo stesso movimento	ロ・ステッソ・モビメント	
M.M.	エム・エム	メトロノームの速さ

２.強さを示す用語と記号

音の強さをダイナミックス、デュナーミクといいます。これらは相対的なもので、実際の強さは演奏者の判断にまかされます。

～強弱が一定したもの～

ppp	ピアニッシシモ	非常に弱く
pp	ピアニッシモ	とても弱く
p	ピアノ	弱く
mp	メゾ・ピアノ	やや弱く
mf	メゾ・フォルテ	やや強く(普通の強さで)
f	フォルテ	強く
ff	フォルティッシモ	とても強く
fff	フォルティッシシモ	非常に強く

～その音だけ特に強くするもの～

sf	sforzand	スフォルツァンド
sfz	sforzato	スフォルツァート
fz	forzato	フォルツァート
rf.	rinforzand	リンフォルツァンド
rfz	rinforzato	リンフォルツァート
rinf.	rinforzato	リンフォルツァート
＞	accent	アクセント

～強弱の変化するもの～

強弱がすぐに変化する標語		
poco ***p***	ポーコ・ピアノ	少し弱く
piu ***f***	ピゥ・フォルテ	今までより強く
meno ***f***	メーノ・フォルテ	今までより弱く
subito ***p***	スービト・ピアノ	急に弱く
fp	フォルテ・ピアノ	強く直ちに弱く
強弱が次第に変化する標語		
crescendo(cresc.)	クレッシェンド	だんだん強く
diminuendo(dim.)	ディミヌエンド	だんだん弱く
decrescendo(decresc.)	デクレッシェンド	だんだん弱く
cresc.al ***ff***	クレッシェンド・アル・フォルティッシモ	フォルティッシモまでだんだん強く
molto cresc.	モルト・クレッシェンド	急なクレッシェンドで
poco cresc.	ポーコ・クレッシェンド	少しクレッシェンドに
poco a poco cresc.	ポーコ・ア・ポーコ・クレッシェンド	少しずつだんだん強く
一定の区間を強くする標語		
marcato	マルカート	一つ一つの音をはっきりと
martellato	マルテラート	一つ一つの音に力を入れて

～速度と強弱をかねる標語～

allargando	アラルガンド	だんだん幅広く、だんだん強く遅く
largando	ラルガンド	だんだん幅広く、だんだん強く遅く
slargando	ズラルガンド	だんだん幅広く
cresc.ed accel.	クレッシェンド・エ・アッチェレランド	だんだん強くそして速く
dim.e rit.	ディミヌエンド・エ・リタルダンド	だんだん弱くそしておそく
calando	カランド	次第におだやかに、弱くそして遅く
morendo	モレンド	命の絶えるように弱くそして遅く
perdendosi	ペルデンドシ	消えるように弱くそして遅く

smorendo	ズモレンド	だんだん遅く、消えるように
smorzando	ズモルツァンド	消えるように弱くそして遅く

３．速さ(強さ)を示す用語の接頭語

assai	アッサイ	非常に
ma non troppo	マ・ノン・トロッポ	しかし過度にならずに
meno	メーノ	今までより少なく
molto	モルト	非常に
non tanto	ノン・タント	多くなく
non troppo	ノン・トロッポ	はなはだしくなく
piu	ピウ	もっと、今までより多く
poco	ポーコ	少し
poco a poco	ポーコ・ア・ポーコ	少しずつ
possibile	ポッシービレ	できるだけ
quasi	クワージ	ほとんど～のように
sempre	センプレ	常に
tanto	タント	多く(molto とほぼ同じ)
un poco	ウン・ポーコ	やや少し

※piu～は普通の *f*、*p* などと違い前と比較して～にするという意味です。piu *f* は今までより強く、piu *p* は今までより弱く、という意味です。meno～は前と比較して～と反対の効果をもたらします。なので meno *f* は今までより弱く、meno *p* は今までより強く、ということになります。

４.発想を示す用語

a mezza voce	ア・メッザ・ボーチェ	ほどよく柔らかい声で
acceso	アッチェーソ	燃えるように
affabile	アッファービレ	やさしく、心地よく
affannato	アッファンナート	苦しげに
affettuoso(con affetto)	アッフェットゥオーソ(コン・アッフェット)	やさしく
agitato	アジタート	激して
alla marcia	アラ・マルチァ	行進曲風に
alla polacca	アラ・ポラッカ	ポーランド風に
alla spagnola	アラ・スパニョーラ	スペイン風に
alla tedesca	アラ・テデスカ	ドイツ風に

alla turca	アラ・トゥルカ	トルコ風に
alla zingara	アラ・ツィンガラ	ジプシー風に
allegramente	アレグラメンテ	あかるく、快活に
amabile(con amabilita)	アマービレ(コン・アマビリータ)	愛らしく、やさしく
amoroso	アモローソ	愛情に満ちて
animato(con anima)	アニマート(コン・アニマ)	生き生きと、元気よく
appassionato	アパッショナート	熱情的に、はげしく
ardente	アルデンテ	燃えるように、情熱的に
arioso	アリオーソ	歌うように
barbaro	バルバロ	野蛮に、あらあらしく
brillante	ブリランテ	輝かしく、華やかに
calmato(calmando)	カルマート(カルマンド)	おだやかに、静かに
cantabile(cantando)	カンタービレ(カンタンド)	歌うように
capriccioso	カプリッチョーソ	気まぐれに、狂想的に
carezzevole	カレッツェーボレ	愛情をこめて
comodo(commodo)	コモド	気楽に、ほどよく
con abbandono	コン・アッバンドーノ	感情のおもむくままに
con allegrezza	コン・アレグレッツァ	快活に
con amore	コン・アモーレ	愛情をもって
con bravura	コン・ブラヴーラ	すばらしくたくみに
con brio	コン・ブリオ	生き生きと
con calore	コン・カローレ	熱情をこめて
con forza	コン・フォルツァ	力強く
con fuoco	コン・フオーコ	熱烈に
con gusto	コン・グスト	品よく
con malinconia(con melancolia)	コン・マリンコニア(コン・メランコリア)	憂うつに
con sentimento	コン・センティメント	感情をこめて
con tenerezza	コン・テネレッツァ	やさしく、愛情をこめて
con tutta la forza	コン・トゥッタ・ラ・フォルツァ	全力をこめて強く
deciso	デチーソ	決然と
delicate(delicatemente)	デリカート(デリカーテメンテ)	繊細に
delizioso	デリチオーソ	甘美に
dolce	ドルチェ	やわらかに、優美に
dolente(doloroso)	ドレンテ(ドロローソ)	悲しげに

elegante	エレガンテ	優美に、優雅に
elegiaco	エレジアーコ	悲しく、
energico(con energia)	エネルジーコ(コン・エネルジア)	精力的に、力強く
eroico(eroica)	エロイコ(エロイカ)	英雄的に
espressivo(con espressione)	エスプレッシボ (コン・エスプレッショーネ)	表情豊かに、感情を表して
fantastico	ファンタスティーコ	幻想的に
feroce	フェローチェ	野性的に激しく
flebile	フレービレ	悲しげに
furioso	フリオーソ	怒り狂って、はげしく
gentile	ジェンティーレ	やさしく
giocoso	ジョコーソ	おどけて、愉快に
gioioso	ジョイオーソ	楽しげに
grandioso	グランディオーソ	壮大に、堂々と
grazioso(con grazia)	グラツィオーソ(コン・グラツィア)	優美に、気品をもって
impetuoso	インペトゥオーソ	熱烈に
lacrimoso	ラクリモーソ	悲しく
lamentabile(lamentoso)	ラメンタービレ(ラメントーソ)	悲しげに、嘆くように
leggiero	レッジェーロ	軽く、軽快に
maestoso	マエストーソ	荘厳に
marciale(marziale)	マルチアーレ	行進曲風に
mesto	メスト	悲しげな、寂しげな
misterioso	ミステリオーソ	神秘的に
mosso	モッソ	躍動して
nobile	ノービレ	気品をもって
parlando	パルランド	話すように、しゃべって
passionatamente(con passione)	パッショナタメンテ(コン・パッショーネ)	熱情的に
passionato	パッショナート	情熱的に、感情的に
pastorale	パストラーレ	田園風に、牧歌風に
pesante	ペザンテ	重々しく、重苦しく
piacevole	ピアチェボーレ	楽しげに、気持ちよく
pietoso	ピエトーソ	あわれみをもって
placido	プラーチド	静かに
pomposo	ポンポーソ	豪華に
quieto	クイエート	静かに

rapidamente	ラピダメンテ	急いで
religioso	レリジョーソ	敬虔に
risoluto	リゾルート	きっぱりと、決然と
rusticana(rustico)	ルスティカーナ(ルスティーコ)	田舎風に、農民風に
scherzando	スケルツァンド	おどけて、こっけいに
semplice	センプリーチェ	単純に、素朴に
sensibile	センシービレ	鋭敏に
sentimentale	センチメンターレ	感傷的に、感情的に
serioso	セリオーソ	厳粛に、重々しく
smanioso	ズマニオーソ	熱狂的に
snello	ズネッロ	敏捷に
soave	ソアーベ	柔らかに、愛らしく
sospirando	ソスピランド	嘆いて
sostenuto	ソステヌート	音の長さを十分に保って
sotto voce	ソット・ボーチェ	声・音を抑えて
spiritoso(con spirito)	スピリトーソ(コン・スピリト)	元気に
stentando	ステンタンド	重たげに
strascinando	ストラシナンド	音を引きずるように
tempestoso	テンペストーソ	嵐のように激しく
tenero	テーネロ	やわらかに
tranquillo	トランクィーロ	おだやかに、静かに
veloce	ヴェローチェ	急いで、すばやく
volante	ヴォランテ	軽快に、飛ぶように

このほかにも、クライネスではアンサンブル中に「トゥッティ」という言葉を耳にすることがあります。「トゥッティ＝ｔｕｔｔｉ（伊）」とは『全部』の意味で、楽器奏者や合唱者が全部演奏に参加するという意味です！

各語の語源等の詳しい説明や、

イタリア語以外の用語も調べたいなと思ったら…

新しい形式による楽典 音楽用語の知識　　遠藤 三郎 著／シンコーミュージック／1993 年

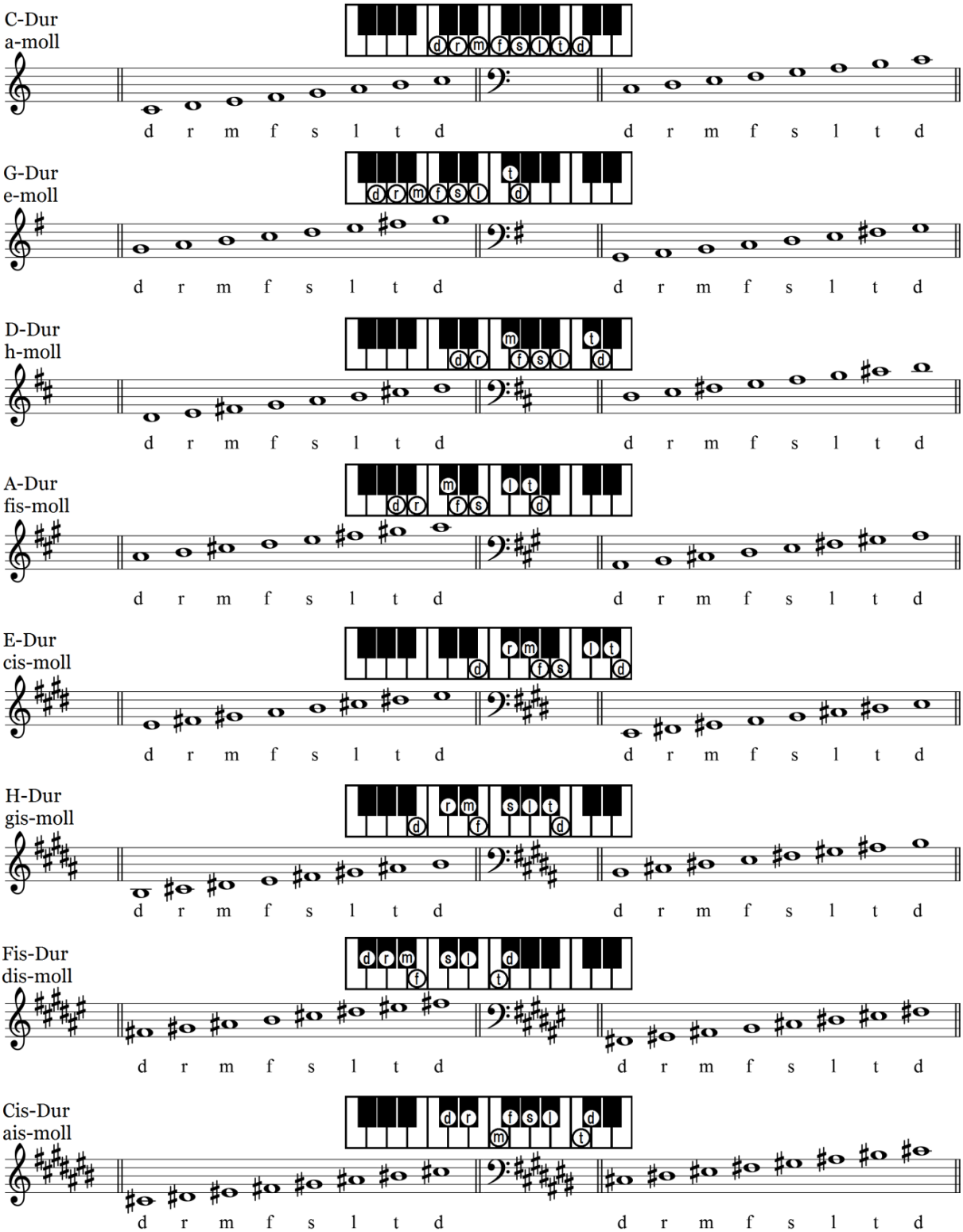
～メモ～

ラストはこれからもっとも使うことになるであろう

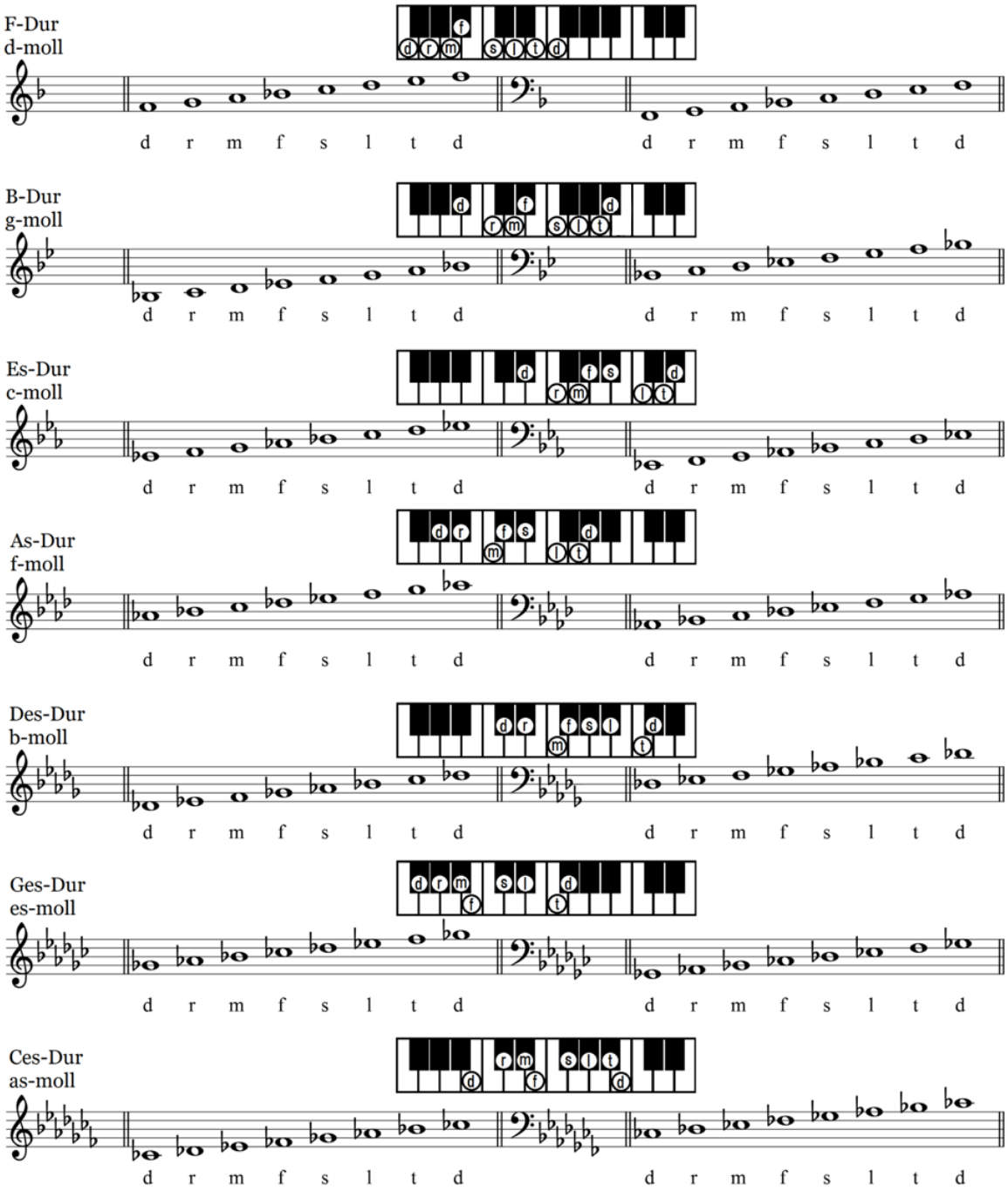
「調の早見表」です！

鍵盤の図もついているので対応させて見ましょう。

調の早見表　1. シャープ系

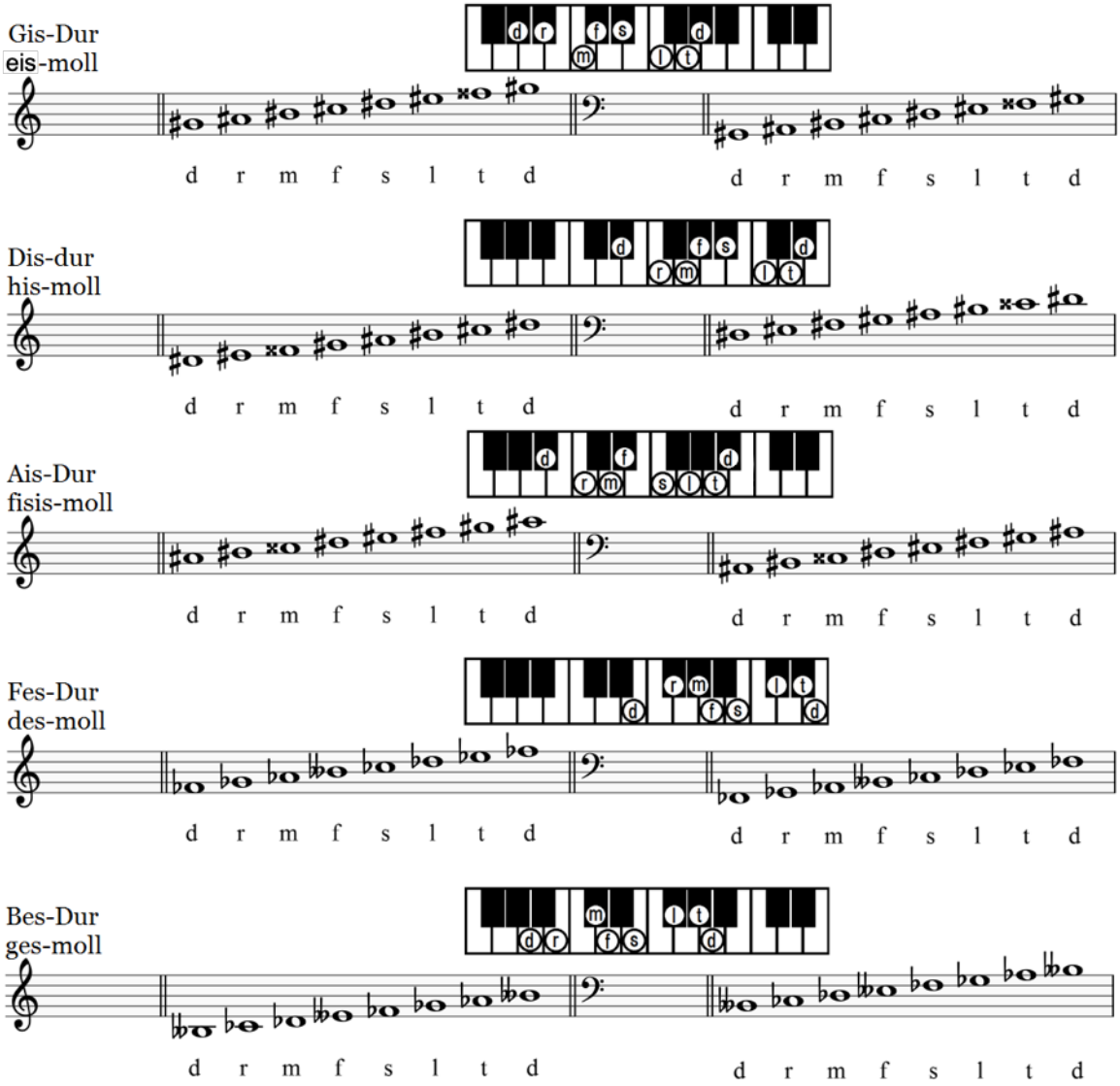


2. フラット系


F-Dur
d-moll
d r m f s l t d
d r m f s l t d
B-Dur
g-moll
d r m f s l t d
d r m f s l t d
Es-Dur
c-moll
d r m f s l t d
d r m f s l t d
As-Dur
f-moll
d r m f s l t d
d r m f s l t d
Des-Dur
b-moll
d r m f s l t d
d r m f s l t d
Ges-Dur
es-moll
d r m f s l t d
d r m f s l t d
Ces-Dur
as-moll
d r m f s l t d
d r m f s l t d

3. 部分転調系

調号で表されるのは前ページまでで全部ですが、曲の途中に、これだけでは表せない調がまれに出てくることがあります。移動ドでそういった調が示された場合はこちらも参考にしてみてください。



～メモ～

2021 年度版「奏音　かのん」

監修　　岡田大輝

編集　　林　夏緒

表紙　　飯野七海

ライブラリアンメンバー

林　夏緒　　河合菜々香　中村遊作　　富田真琴

飯野七海　　石田大晟　　石山　遊　　久保田凱斗

佐藤　環　　高橋里緒　　常松百合香　原　朋史

藤井淳太朗　石井優芽　　中田悦人　　橋西穂果

人見　温　　安永汐里　　山田梨花

制作　ライブラリアン